

# ジェンダーと創作ダンス

パフォーマティブな身体を通して考える、視覚優位の感覚の見直し

Gender and Creating Dance

牛若孝治

USHIWAKA Koji

立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域修士課程

Ritsumeikan University

Key words: blind, gender, creating dance

人間の情報のやく80パーセントは、「視覚」に頼っており、そのことについて何の疑いもなく、自明のように思ったりやり過ぎたりしていることが多い。その一方で、この「視覚」という感覚を巨大化してしまったために、そこから自由になることができずに、何らかの「生きつらさ」を感じている人がいることも事実である。その最たる例が、「ジェンダーに規定された視覚優位のものの方によって、芸術が成り立っている」ということである。視覚障害、トランスジェンダーの私が、そのような社会の現象に異議を唱え、昨年「視覚に特化しない創作ダンス」の活動を始めるようになったのは、芸術が、視覚というただひとつの感覚によって評価されることへの「恐れ」や「批判」をこの社会に提言していくことによって、新しい芸術観賞のあり方を模索したいと考えたからである。

視覚に障害のないダンサーに誘われて、「創作ダンスの初舞台」を踏んだのは、2010年3月、東京で行われた「障害のある人のダンス（エイブルアート、オンステージ）」に出演したときである。練習当初、視覚に障害のないダンサーから「上着をひらひらさせてみて」とか、「床にテープで絵を描いてみて」など、視覚に特化した事柄を要求されたので、そのことに疑問を抱いた私は、次のような作品をダンサーの前に提示した。作品のタイトルは『タッチングフェイス』。作品のモデルは、私が長年の間、自己の見た夢を章節に書き溜めていたものを張り合わせ、4こまの話をひとつの物語にしたものである。「牛乳の膜」という、日常どこにでもあるちょっと得たものの知れない物体が、4こまの話の中心にあり、物語に一貫性を持たせている。（詳しくは、ポスターを参照）ダンサーはこの作品に興味を示し、3月の東京での講演となった。

観客たちは、私たちの演技に一喜一憂していた。また、私たちも、観客と一緒にその場の「空気」を作ることが

できた。つまり、どちらかが演技し、どちらかが鑑賞すると言う2項対立的な関係性ではなく、観客と私たちが一体となって、ひとつの舞台を作り上げているのである。また、普段の練習においても、ダンサーと私の関係は、視覚に障害のある私が非援助者で、ダンサーが援助者、という関係ではなく、双方が台頭に作品を作り上げていったのである。

障害のある人と芸術活動をするさい、障害のない人の価値観や感性を、障害のある人に押し付けて、援助者、非援助者の関係性を構築することによって、障害のない人が自己満足に陥りやすい。しかし、私の創作ダンスというのは、そのような「障害」や「援助者、非援助者」を越えた「人間と人間の感性のコラボレーション」にあるのだ。つまり、『感性』に『完成』はない、だからいつでも『未感性』というのが私の創作ダンスに対する思いである。

今後は、このような「視覚に特化しない作品作り」を通して、本来持っている豊かな「感性の発掘」に取り組みながら、一人でも多くの人たちと活動していくことを目標にしている。